

要介護高齢者のQOL指標に関する研究

— 日常生活の中における快の情動について —

伊東 明日香・綿 祐二*

Abstract

The purpose of this study is that to find factor of “The feeling of fragrant” in elderly with long-term care in daily living, and to declare those factor of the feeling of fragrant.

The data for this study were obtained from 60 elderly with long-term care using questionnaire and interview survey in 2003.

As the main results, 1) there are “The feeling of fragrant” in fundamental life to satisfy fundamental desire in daily living, 2) it show that recreation times and excretion times relative to happiness, 3) and recreation times does not always satisfy. It suggests a theory based Person-Centered-Approach. In this paper raise some consideration reflection for the future style of individual care.

It suggests the longitudinal study about the feeling of fragrant in daily living.

Key Words: Quality of Life, elderly with long-term care, The feeling of fragrant, daily living

1. 研究の背景及び問題の所在

2002年度から小規模生活単位型特別養護老人ホームに対応した施設整備費補助金が設けられ、ユニットケア型の施設サービスが注目を集めるようになった。この取り組みは、単に居室を個

Measuring of Quality of Life index in elderly with long-term care

—The feeling of fragrant in daily living—

* Asuka Ito・Yuji Wata

Correspondence Address: Faculty of Human Studies, Bunkyo Gakuin University,
1196 Kamekubo, Oimachi, Iruma-Gun, Saitama 356-8533,
Japan.

Accepted October 13, 2004. Published December 20, 2004.

室化するのではなく「個別援助」に対するアプローチへの一つの指針となるものだった。そして2003年になると介護支援専門員が各施設に必置となり、個別援助をサービスの中に浸透させるための役割が期待されるようになった。

一方、利用者自身、個別援助を受ける権利は、その法的根拠として介護保険法の目的にあるように、日常生活をより豊かに、主体的に自立した生活を実現することにある。こうした背景の中、ますます注目を集めているのが Quality of Life（以下QOLと略す）という概念である。

上田⁽¹⁶⁾や大川はQOLをあえて一言で表すならば、「生」という言葉であると述べている。「生」を全うするための営みを「生活」とするならば、生活とは人が生きていくことそのものの活動であるといえる。憲法第25条に定められる生活とは健康で文化的な営みが法的に守られ、人が人として安楽に生命を維持していくための活動をいうとされ、また充実した生活を営む権利として同法第13条に幸福追求権が定められている。黒木は「生きがい」についてA.Hマズロー⁽⁴⁾のいう基本的欲求と心理的成熟の基盤の上に形成されるものであると述べている。「生活」とは満足感や楽しみといった主観的感覚を伴う活動であり、自分らしく「生きる価値」を見出し⁽⁸⁾ていくものなのである。

QOLはこれまで医学的、心理学的、社会学的、倫理的見地から複合学際的に研究が進められており、その構造は複雑で多くの要因が絡み合っていると考えられる⁽²⁾⁽³⁾⁽⁶⁾⁽⁷⁾⁽⁹⁾⁽¹⁴⁾⁽¹⁵⁾。そして、これらの研究の中でQOLは量と方向を表すベクトル（Fig1）であるといわれている⁽¹⁷⁾⁽¹⁸⁾。様々な要因によって変化するQOLを評価するとき、それを測るときのものさしは一人ひとり異なるものであり、今日その尺度の開発に力が注がれている。例えば、国連社会開発研究所やOECD等が取り組んでいるものに、社会指標がある。これはQOLと測定の強化を一つのねらいとしており、人々の福祉、生活に寄与する客観的な要因、すなわち満足度、幸福度、不安度、切実度、重要度といった生活の主観的な意識などを数量化したものである。

また日本では、1974年の社会指標を基礎に1979年、1985年、1992年に大幅改正がなされ、現在「新国民生活指標（PLI）」が毎年発表されている。これは「豊かさの指標」とされており、その活動領域は「住む」「働く」「育てる」「癒す」「遊ぶ」「学ぶ」「交わる」に分けられている⁽⁵⁾。

これまでの研究では、満足・不満足といった一元的な尺度でQOLが測られ、こういった要因に起因して、プラスの方向にどれだけ動くかといったプロセスについての研究はほとんどなされていない。しかし、先述したようにQOLとは量と方向を因るものである。結果は不満足であっても、何らかの要因によってプラスの方向に変化したとき、QOLもまたプラスの方向に動いているのである。例えば Fig2 にみるように、5段階のリッカートスケールを用いた場合、統計的に処理をすると、3を基準として、1・2は不快群、4・5は快群に分類される。そしてこの Fig2 の場合、2に○がついているため、本来ならば不快群に分類されがちである。しかし、この○が1から2への変化がみられた場合、QOLが快の方向へ動いたと捉えることができる。また、○の位置が1から3、1から4とより大きな変化が窺え、この矢印が表す変化の量が大きければ大きいほど快への影響が強いことを表していることになる。

本研究では、この矢印がQOLの向上を意味するのではないかという仮説を立てた。

そこで、主観的感情のうち、その一部を構成する快の情動に着目し、「快の情動」というものさしを用いてQOLを測りうるか、また日常生活のどのような場面に起因してどのくらい変化するかを明らかにしようと本研究に着手した。

なお本研究でいう快とは楽しみや、喜び、満足感といったプラスに働く感情を指す。

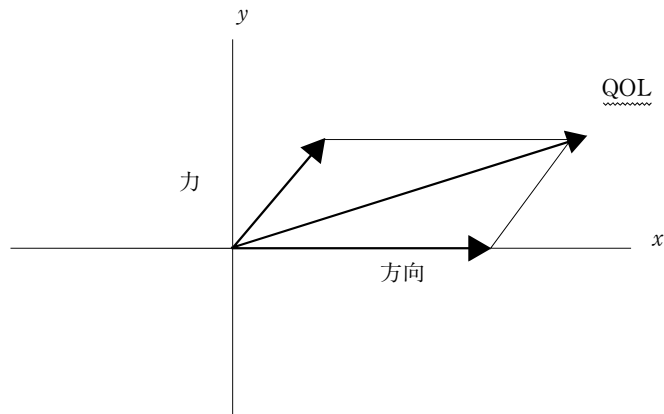


Fig1

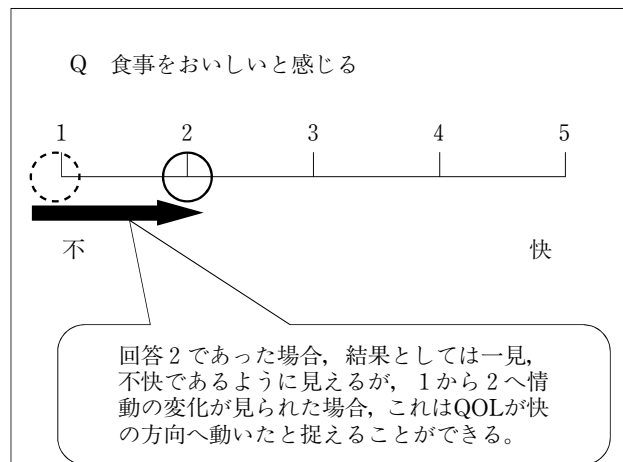


Fig2 QOLの変動

2. 研究の目的

要介護高齢者の日常生活において「快の情動」を規定する要因を探し、それらの要因が快の情動に及ぼす影響を明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

1) 調査の手順

日常生活の様々な事象について整理をし、西彼町一般住民（80名）を対象に、直接面接法を用いてプレテストを行った。そこで明らかになった問題点の改善を図ったのち、再び西彼町一般住民（144名）を対象に配表調査法を用いて本調査を実施した。その結果をもとに、有意に動く項目について抽出し、再度調査項目を整理し、要介護高齢者を対象に直接面接法を用いて本調査を実施した。

Table1 質問紙による調査項目

要因群	項目	カテゴリー
個人的属性	(1) 年齢 (2) 性別 (3) 趣味	() 歳 ①男 ②女
生活満足度 ・睡眠	(1) 睡眠に対する満足度 (2) 朝気持ちよく目が覚める (3) 毎晩熟睡できている (4) 朝起きたときの気だるさがない (5) 睡眠時間はとれている (6) 悩みや不安で眠れない	①十分満たされている ②満たされている ③どちらでもない ④あまり満たされていない ⑤全く満たされていない
・清潔（入浴など）	(1) 清潔に対する満足度 (2) 入浴は楽しみである (3) 入浴後気分よくリラックスできる (4) 入浴は気分転換になる (5) 入浴時間はとれている (6) 洗淨の介助は気持ちがいい (7) 着脱の介助は満足している (8) 臭いや埃など身辺で気になるところがある	
・食事	(1) 食事に対する満足度 (2) 好きなものを食べている (3) 食事がおいしいと感じる	

	<ul style="list-style-type: none"> (4) 食事の時間が楽しみである (5) 空腹感があり食欲がある (6) 食事の介助は満足している (7) 食事形態は満足している (8) 食事の環境が整っている (9) 食事中話がはずむ (10) ベッドから離れて食事をしている 	
・ 整容	<ul style="list-style-type: none"> (1) 整容に対しての満足度 (2) 服は毎日着替えている (3) 髪を整えると気持ちがいい (4) 着替えることで気分転換になる (5) 好きな服を着ている (6) おしゃれをしている 	
・ 余暇	<ul style="list-style-type: none"> (1) 余暇に対する満足度 (2) 話し相手がいる (3) 最近心から笑ったことがある (4) レクリエーションの時間を楽しみにしている (5) 生きがいを感じるような楽しみがある 	
・ 排泄	<ul style="list-style-type: none"> (1) 排泄に対する満足度 (2) 排泄の介助は満足している (3) 人に気兼ねすることがない (4) プライバシーが守られている (5) 臭いが気にならない (6) 排泄後不快感はない (7) 便通は規則的である 	
・ 社交	<ul style="list-style-type: none"> (1) 社交に対する満足度 (2) 家族が面会に来る (3) 同室の人と楽しい時間を過ごしている (4) 大きな行事で地域の人と関わる機会がある (5) 地域の人と話をする機会がある (6) 職員はいつでも相談に応じてくれる (7) 相談に乗ってくれる友達がいる 	
・ 移動	<ul style="list-style-type: none"> (1) 移動に対する満足度 (2) 移動介助は満足している (3) 食堂等に移動するとき手伝ってもらうことに気兼ねする (4) 外に出たいときは自由に出ることができる。 (5) 自由に動けないことにストレスを感じる 	
生活幸福度	日々の生活の幸福度	①非常に幸せ②幸せ③どちらでもない④あまり幸せではない⑤全く幸せではない
自由記述	どのような時に楽しい・嬉しいと感じるか	自由回答

2) 分析の手順

本研究は生活幸福度と生活場面、及び生活場面と事象との関連を見るために、生活の各場面を1)睡眠 2)清潔 3)食事 4)整容 5)余暇 6)排泄 7)社交 8)移動に分け、プレテスト及び本調査で選出された各事象に基づいて、意識調査を行った。

なお、本研究は快の情動を幸福度と満足度という尺度で測定した。その結果を基に重回帰分析を用いて、生活幸福度と各生活場面との関連を検証した。

4. 結 果

1. 単純集計の結果

生活のそれぞれの場面において、各項目が満足しているかという質問に対して「十分満たされている」（5点）「満たされている」（4点）「どちらでもない」（3点）「あまり満たされていない」（2点）「全く満たされていない」（1点）の5件法で回答して頂き、獲得した得点を集計し、平均値を算出した（Table2）。その結果、数字が大きいほど満足の傾向が強いことを示しており、「清潔（入浴）」「食事」「排泄」場面において高い数値がみられる。それぞれの場面における最初の項目は、全体的な満足度感に対する項目であるが、この項目が、最も高かったのは「食事」（4.00）であり、逆に一番低かったのは「余暇」（3.11）であった。さらに、それぞれの満足度の平均値を大きく上回って高い値を示しているのは、「排泄後の不快感はない」（4.24）「食事おいしいと感じる」（4.23）「食事の時間が楽しみである」（4.23）という結果であった。

Table2 単純集計

要因群	項目	平均値
睡眠	睡眠に対する満足度	3.83
	朝気持ちよく目が覚める	3.85
	毎晩熟睡できている	3.48
	朝起きたときの気だるさがない	3.60
	睡眠時間はとれている	3.96
	悩みや不安で眠れない	3.58
清潔	清潔に対する満足度	3.70
	入浴は楽しみである	4.04
	入浴後気分よくリラックスできる	3.89
	入浴は気分転換になる	3.17
	入浴時間はとれている	3.52
	洗浄の介助は気持ちがいい	4.20
	着脱の介助は満足している	4.10
	臭いや埃など身辺で気になるところがある	4.10

食事	食事に対する満足度	4.00
	好きなものを食べている	4.18
	食事がおいしいと感じる	4.23
	食事の時間が楽しみである	4.23
	空腹感があり食欲がある	3.62
	食事の介助は満足している	3.79
	食事形態は満足している	4.05
	食事の環境が整っている	3.62
	食事中話がはずむ	2.87
	ベッドから離れて食事をしている	3.41
整容	整容に対する満足度	3.68
	服は毎日着替えている	3.40
	髪を整えると気持ちがいい	3.86
	着替えることで気分転換になる	3.78
	好きな服を着ている	3.80
	おしゃれをしている	3.54
余暇	余暇に対する満足度	3.11
	話し相手がいる	3.72
	最近心から笑ったことがある	3.74
	レクリエーションの時間を楽しみにしている	3.51
	生きがいを感じるような楽しみがある	3.46
排泄	排泄に対する満足度	3.68
	排泄の介助は満足している	3.61
	人に気兼ねすることがない	3.53
	プライバシーが守られている	4.03
	臭いが気にならない	3.84
	排泄後不快感はない	4.24
	便通は規則的である	3.68
社交	社交に対する満足度	3.52
	家族が面会に来る	3.44
	同室の人と楽しい時間を過ごしている	3.33
	大きな行事で地域の人と関わる機会がある	3.10
	地域の人と話す機会がある	3.23
	職員はいつでも相談に応じてくれる	3.56
相談に乗ってくれる友達がいる	3.21	
移動	移動に対する満足度	3.52
	移動介助は満足している	3.70
	食堂等に移動するとき手伝ってもらうことに気兼ねする	3.43
	外に出たいときは自由に出ることができる。	3.11
	自由に動けないことにストレスを感じる	3.14

2. 重回帰分析の結果

次にQOLを構成する要因の説明率について、生活の幸福度を被説明変数とし1)睡眠 2)清潔 3)食事 4)整容 5)余暇 6)排泄 7)社交 8)移動の8つの生活場面を説明変数におき、重回帰分析にてそれぞれの関係の強さを分析するとともに、それぞれの変数ごとに統計的に有意であるかについて検討した (Table3)。

さらに、1)睡眠 2)清潔 3)食事 4)整容 5)余暇 6)排泄 7)社交 8)移動の8つの生活場面を被説明変数とし、それぞれの項目との関係の強さについて分析し、統計的に有意であるかについて検討した (Table4～Table11)。

Table3 8つの生活場面と幸福度

	標準偏回帰係数 (β)	標準偏差 (γ)
睡眠	0.17	0.25*
清潔	-0.12	-0.01
食事	0.05	0.17
整容	0.07	0.18
余暇	0.20*	0.24*
排泄	0.23*	0.29*
社交	-0.08	-0.05
移動	-0.11	-0.00
重相関係数 (R)	0.423**	

* $p < .05$ ** $p < .01$

まずTable3の生活幸福度と8つの生活場面との関連について「睡眠」(4.3%)「清潔」(0.1%)「食事」(0.9%)「整容」(1.3%)「余暇」(1.4%)「排泄」(1.2%)「社交」(0.4%)「移動」(0%)で、9.6%の寄与率でQOLの全体の説明がされている。

次に満足度とそれぞれの項目との関係の強さについての結果を検討してみる。

Table4 睡眠

	標準偏回帰係数 (β)	相関係数 (γ)
朝気持ちよく目が覚めた	0.32**	0.41**
毎晩熟睡できている	0.30**	0.40**
朝起きたときの気だるさがない	-0.14	0.13
睡眠時間はとれている	0.00	0.25*
悩みや不安で眠れない	0.12	0.26*
重相関係数 (R)	0.51**	

* $p < .05$ ** $p < .01$

睡眠についてTable4より「朝気持ちよく目が覚めた」(13.1%)「毎晩熟睡できている」

Table5 清潔（入浴）

	標準偏回帰係数(β)	相関係数(γ)
入浴は楽しみである	0.73**	0.80**
入浴後気分よくリラックスできる	-0.03	0.40**
入浴は気分転換になる	0.05	0.46**
入浴時間はとれている	0.13	0.40**
洗浄の介助は満足している	0.04	0.37**
着脱の介助は満足している	0.03	0.02
臭いや埃など身辺で気になるところがある	0.09	0.25*
重相関係数(R)	0.823**	

*p<.05 **p<.01

Table6 食事

	標準偏回帰係数(β)	相関係数(γ)
好きなものを食べている	0.26*	0.49**
食事がおいしいと感じる	-0.03	0.37**
食事の時間が楽しみである	-0.01	0.59**
空腹感があり食欲がある	0.34**	0.61**
食事の介助は満足している	-0.12	0.14
食事形態は満足している	0.02	0.43**
食事の環境が整っている	0.23*	0.18
食事中話が弾む	0.27*	0.45**
ベッドから離れて食事をしている	0.18	0.30**
重相関係数(R)	0.725**	

*p<.05 **p<.01

Table7 整容

	標準偏回帰係数(β)	相関係数(γ)
服は毎日着替えている	0.47**	0.48**
髪を整えると気持ちがいい	-0.09	-0.04
着替えることで気分転換になる	0.09	0.10
好きな服を着ている	0.01	0.12
おしゃれをしている	0.02	0.18
重相関係数(R)	0.489**	

*p<.05 **p<.01

(12.0%)「朝起きたときの気だるさがない」(1.8%)「睡眠時間はとれている」(0%)「悩みや不安で眠れない」(3.1%)で、睡眠の満足度の30%の寄与率で説明されている。

また清潔（入浴）についてTable5より「入浴は楽しみである」(58.4%)「入浴後気分よくリラックスできる」(1.2%)「入浴は気分転換になる」(2.3%)「入浴時間は十分にとれている」(5.2%)「洗浄の介助は気持ちがいい」(1.5%)「臭いや埃など身辺で気になるところがあ

る」(2.3%)で71%の寄与率で清潔の満足度の説明がされている。

同様に食事についてTable6より「好きなものを食べている」(12.7%)「食事がおいしいと感じる」(1.1%)「食事の時間が楽しみである」(0.6%)「空腹感があり食欲がある」(20.7%)「食事の介助は満足している」(1.7%)「食事の環境が整っている」(4.1%)「食事中話がはずむ」(12.2%)「ベッドから離れて食事をしている」(5.4%)で59.4%の寄与率で食事の満足度の説明がなされている。

整容についてTable7より「服は毎日着替えている」(22.6%)「髪を整えると気持ちがいい」(0.4%)「着替えることで気分転換になる」(0.9%)「好きな服を着ている」(0.1%)「おしゃれをしている」(0.4%)で、24.4%の寄与率で整容の満足度の説明がされている。

Table8 余暇

	標準偏回帰係数(β)	相関係数(γ)
話し相手がいる	0.27*	0.29*
最近心から笑ったことがある	-0.14	0.14
レクリエーションの時間を楽しみにしている	0.33**	0.34**
生きがいを感じるような楽しみがある	0.01	0.13
重相関係数(R)	0.413**	

* $p < .05$ ** $p < .01$

そして余暇についてTable8より「話し相手がいる」(7.8%)「最近心から笑ったことがある」(2.0%)「レクリエーションの時間を楽しみにしている」(11.2%)「生きがいを感じるような楽しみがある」(0.1%)で、21.1%の寄与率で余暇の満足度の説明がされている。

Table9 排泄

	標準偏回帰係数(β)	相関係数(γ)
排泄の介助は満足している	-0.21	-0.06
人に気兼ねすることがない	0.26*	0.28*
プライバシーが守られている	0.06	0.24*
臭いが気にならない	0.05	0.23*
排泄後不快感はない	0.45**	0.49**
便通は規則的である	-0.01	0.25*
重相関係数(R)	0.571**	

* $p < .05$ ** $p < .01$

排泄についてはTable9より「排泄の介助は満足している」(1.3%)「人に気兼ねすることがない」(7.3%)「プライバシーが守られている」(1.4%)「臭いが気にならない」(1.2%)「排泄後の不快感はない」(22.1%)「便通は規則的である」(0.3%)で、排泄後の満足度の33.6%の寄与率で説明がされている。

Table10 社交

	標準偏回帰係数(β)	相関係数(γ)
家族が面会に来る	0.26*	0.36**
同室の人と楽しい時間を過ごしている	0.14	0.29*
大きな行事で地域の人と関わる機会がある	-0.07	0.26*
地域の人と話す機会がある	0.24*	0.35**
職員はいつでも相談に応じてくれる	0.05	0.13
相談に乗ってくれる友達がいる	0.12	0.28*
重相関係数(R)	0.487**	

* $p < .05$ ** $p < .01$

さらに社交についてTable10より「家族が面会に来る」(9.4%)「同室の人と楽しい時間を過ごしている」(4.1%)「大きな行事で地域の人と関わる機会がある」(1.8%)「職員はいつでも相談に応じてくれる」(0.7%)「相談にのってくれる友達がいる」(3.4%)で19.4%の寄与率で社交の満足度の説明がされている。

Table11 移動

	標準偏回帰係数(β)	相関係数(γ)
移動介助は満足している	-0.09	-0.06
食堂に移動するとき手伝ってもらうことに気兼ねする	-0.08	-0.02
外に出たいときは自由に出ることができる	0.29*	0.32**
自由に動けないことにストレスを感じる	0.24*	0.29*
重相関係数(R)	0.409**	

* $p < .05$ ** $p < .01$

最後に移動についてTable11より「移動介助は満足している」(0.5%)「食堂に移動するとき手伝ってもらうことに気兼ねする」(0.2%)「外に出たいときは自由に出ることができる」(9.3%)「自由に動けないことにストレスを感じる」(7.0%)で17%の寄与率で移動の満足度の説明がされている。

5. 考 察

まず生活幸福度と8つの生活場面の関係の強さについてTable3より、8つの独立変数によって9.6%の寄与率で生活幸福度全体における説明がされていた。つまり生活幸福度全体をこれらの独立変数によって9.6%と説明してしたが、90.4%はさらに別の要因によって説明されることを表す。

次に満足度と各生活場面との相関において高い寄与率がみられたのは「清潔」（71.0%）及び「食事」（59.4%）場面であり、用いられた項目が満足度に強く影響していたことがわかった。それらの細かい内訳は、清潔については「入浴は楽しみである」という項目、また食事については「空腹感があり食欲がある」「好きなものを食べている」「食事中話がはずむ」といった項目が強く満足に影響していることがわかった。そのほか睡眠では「朝気持ちよく目が覚めた」「毎晩熟睡できている」という項目、整容では「服は毎日着替えている」排泄では「排泄後の不快感はない」といった項目がそれぞれ満足度に強く影響していることがわかった。つまりこういった場面において、具体的・直接的な個別援助が必要であることを示唆するものである。

一方、「移動」「社交」「余暇」「整容」の寄与率はとても低い結果が出ている。つまり本調査においてこれらは、「快の情動」という尺度ではそれぞれの満足度を説明できなかったことを意味する。これらの項目についてQOLを測っていきこうとする場合「快の情動」以外の尺度を用いてQOLを測っていく必要があると思われる。

また余暇場面に関して、単純集計では満足傾向が低かったにもかかわらず、Table3の幸福度との関係において強い影響がみられた。これは、余暇場面では極端な情動の変化がみられなかったことが原因であると推察できる。つまり、余暇やレクリエーションといった時間は、もともと楽しいものであるという意識が強いことや、参加者自身のモチベーションが高いために、5段階の尺度を用いて主観的情動を測定した場合、結果としては高い数字が得られるが、それ以上の大きな情動の変化がないためにこのような結果になったと考えられる。

そして、Table3より「排泄」「睡眠」の項目がそれぞれ生活の幸福度に強く影響していることを示していたが、Table9、Table4より、「排泄」33.6%、「睡眠」30.0%と寄与率は低い結果となっている。カンベルら（1976）は「加齢に伴って期待と欲求水準が低下する」と報告している。つまり生理的な活動はそれ自体生命を維持するために必然的な生活活動であるがゆえに、その分満足感を感じにくい項目であると推察する。すなわちこれもまた同様に「快の情動」以外の尺度を用いてQOLを測っていく必要があることを示唆するものだと考える。

後藤らは「排泄」「睡眠」「食事」についてADLレベルによる行動時間の差はあまりみられないことを指摘し、さらに「排泄の自立度」と活動水準の相関において、有意差がみられたことも報告している⁽¹⁾。つまり、基礎生活場面に関しては、利用者のADLレベルに応じた見守りや介護、緊急の場合のナースコール等の設備によって、満足度及び幸福度との関連が強くなるのではないかと推察する。

これらの結果より以下のことが指摘できる。

- ①直接援助に対する項目において寄与率の高い傾向が窺える。
- ②寄与率が高く満足傾向が強かった生活場面の検討から、楽しみや喜びといった快の情動への影響は基本的欲求といわれる基礎生活の中にも数多く存在している。

これまで、喜びや楽しみといった「快の情動」は、ゆとりや遊びといった余暇生活の中に見

出そうとする傾向が強かったが、実際日常生活の中における快という情動は、基本的欲求といわれる基礎生活の中にも数多く存在しており、今後個別性を重視した援助を展開していく上で、基本的な欲求に対する主体性の保障というものが、一つの大きな柱になると考えられる。

介護保険法の目的にもあるように特別養護老人ホームは、在宅に復帰することを基本方針としており、在宅での生活と切り離されたものではない。その意味で、特別養護老人ホームは「経過施設」⁽¹⁹⁾であり、その生活は連続したものと捉えるべきである。快の情動とは、個人差を伴うものである。それはこれまで利用者が培ってきた生活習慣の影響が大きい基礎生活との関連が強いことが推察される。⁽¹⁰⁾ゆえに、個別性に配慮した援助のあり方の一つの指針として、利用者の「生活史」に着目し、その特性に基づいた生活を維持できるように、提供される福祉サービスに十分反映していくことで、より主体的に自立した生活の実現に繋がるといえる。

本研究は援助者が個別援助と質の良いサービスを展開していく上での一助になると考える。

また単純集計の結果で「余暇」場面に関して満足傾向が低かったにもかかわらず、幸福度との関係において強い影響がみられた。このことより、今後さらに快の情動に関する要因を追求していく必要があることを示唆するものである。

集団生活が中心となる施設において、個別援助のあり方は、今後検討していくべき大きな課題の一つである。「指定介護老人福祉施設の人員、設備及び運営に関する基準」等の経過措置の終了をもって、各施設に必置となったケアマネジャーの役割と機能についての報告があるように、個別援助をサービスの中に浸透させるという役割がケアマネジャー及び施設等に期待されて⁽¹¹⁾おり、その重要性は今後益々高くなると思われる。

リッチモンドは「個々人はそれぞれ自分自身の意志と目的をもっており、受身の役割を演ずるのには全く適していない。人間は受身の役割を演ずるときには、墮落してしまうのである。」⁽¹²⁾と説いている。個々人の抱える問題点やニーズは、集団生活の中において発見しにくいものである。しかしフレイレの言葉を借りるならば、「沈黙の文化」⁽¹³⁾にこそ意識化していくべきであり、利用者の声に耳を傾けようとする姿勢こそまさにソーシャルワークに求められるスキルなのである。

これらを踏まえ、QOLの向上を目指す方向性として、快を中心とした個別援助のあり方を抜本的に見直す必要があると考える。個人的及び集団的エンパワメントを直接実践の核とし、従来どおり個別的なニーズ把握と実現はもちろんのこと、利用者のそこでの役割の獲得と、グループダイナミックスの活用が直接援助における今後の課題の焦点となってくるのではないだろうか。

6. 参考・引用文献

- (1) 後藤真澄・若松利昭：通所介護利用高齢者の居宅生活活動の実態とサービス利用による影響。介護福祉学，10：9-18。
- (2) 萩原俊男・三上洋：医療におけるQOLとはなにか。からだの科学，188：16-19（1996）。
- (3) 石原治・内藤佳津雄・長嶋紀一：主観的尺度に基づく心理的な側面を中心としたQOL評価表作成の試み。老年心理学，14：43-50（1992）。
- (4) 黒木邦弘：学びやすいレクリエーション援助。第3版，p32-33，金芳堂，東京（2002）。
- (5) 厚生省高齢者ケアサービス体制検討委員会：介護支援専門員標準テキスト（第1巻），初版，139-149，長寿社会開発センター，東京（1998）。
- (6) 金子勝司・小池和幸：高齢者の身体レクリエーション活動の効果と支援体制づくり～高齢者とその家族のQOLとの関係～。レジャー・レクリエーション研究，48：43-52（2002）。
- (7) 萱野一則：QOL評価の実際。からだの科学，188：20-23（1996）。
- (8) M・チクセントミハイ/今村浩明（訳）：楽しみの社会学。初版，19-34，新思索社，東京（2000）。
- (9) 三上洋：高齢者のQOL。からだの科学，188：58-63，（1996）。
- (10) 三好春樹：自立支援の入浴ケア。訪問看護と介護，医学書院 8（9）：6。
- (11) 永田千鶴：高齢者の介護サービスの「質」の保障。介護福祉学，8：26-35（2001）。
- (12) メアリー・E・リッチモンド/小松源助（訳）：ソーシャル・ケース・ワークとは何か。第9版，162，中央法規出版，東京。
- (13) パウロ・フレイレ/小沢有作ら（訳）：被抑圧者の教育学。第1版，260，垂紀書房，東京（2002）。
- (14) 齋藤和子：痴呆性老人のQOL。からだの科学，188：47-49（1996）。
- (15) 柴田博：高齢者のQuality of Life (QOL)。日本公衆衛生雑誌，4：1（1996）。
- (16) 上田敏・大川弥生：リハビリテーションとQOL。からだの科学，188：51-57（1996）。
- (17) 綿祐二・山崎秀夫：在宅要介護高齢者の介護者のQOL指標に関する研究。総合都市研究，63：15-25（1997）。
- (18) 綿祐二・山崎秀夫：都市住宅重症心身障害児の介護者のQOL指標に関する研究。総合都市研究，66：57-67（1998）。
- (19) 横山正博・富士原柳子：介護保険施設における介護支援専門員の役割と機能。介護福祉学，10：81-87（2003）。